# 寄り添い支える
鹿児島介護の現場から

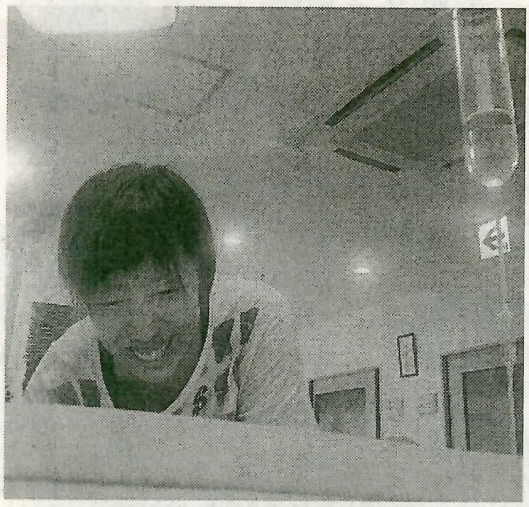
# 老いに備え周囲と話を

林田　貴久

## 胃ろう

皆さんは胃ろうという言葉をご存じですか。胃ろうは、口から食事のとれない方やむせ込みがあり肺炎などを起こしやすい状態の方に、腹部にろう孔という1㌢ほどの穴をあけ、胃の内部に直接チューブを通して栄養を入れる栄養投与の方法です。現在日本では、約40万～60万人が利用しているようです。この数は、世界的に見ても突出しています。

「あなたが高齢になり、何らかの要因で口から物を食べられなくなったらどうしますか」。この質問に対して、多くの人が「それ以上は望まない」「管は入れてほしくない」と答えます。しかし、胃ろうが必要となる状態では、本人が判断することが難しい状況が多いといえます。


胃ろうの準備をする職員

私の勤務する特別養護老人ホーム鹿屋長寿園では、現在利用定員110人中38人が胃ろうです。そこに至る過程はさまざまですが、ご家族や医療関係者、施設職員らで検討を重ねます。

その過程で、胃ろうを選択しない場合もあります。口から食べる訓練をして摂取が可能になる人もおり、一概に胃ろうが良いとか良くないとかいう問題でもありません。また、見た目のイメージだけで決めるのも賢明ではないでしょう。

当然ですが、胃ろうは病院で取り付けます。口から食事がとれないと直接「死」に結びつくため、医師から胃ろうの話が出てきます。しかし医師の間でも、超高齢者に対する延命にはさまざまな考え方があるようです。

「胃ろうをするか、しないか」の最終判断は家族に委ねられます。私たちは元気なときは「もし自分が口から食べられなくなったらどうしよう」とはあまり考えません。多くの場合、心の準備もないままに、身内や親がそのような状態になったときの判断を任せられることになるので、家族の心は揺れます。

私はこれからの超高齢社会では、自分の生き方を自分で考え、普段から周囲の人と話をすることが重要だと思っています。そうすれば、少なくとも本人の思いをくんだ形での判断が可能になるのではないかと思うのです。

胃ろうや延命の是非のみを問うのではなく、自分らしく生きるとはどういうことかをすべての人が考え、老いに備えることが、結果としてその人らしく最期まで生きるということにつながるのではないかと思います。

今日も長寿園では、食事の時間に合わせて職員が胃ろうの方の準備を始めます。職員がAさんに、笑顔で声を掛けました。「Aさん、調子はどうですか」。Aさんも笑顔でうなずき、いつもと変わらぬお昼のひとときが始まりました。（特別養護老人ホーム鹿屋長寿園法人統括本部長兼副施設長）

はやしだ・たかひさ氏　1968年、鹿屋市生まれ。全国重症心身障害児（者）を守る会（東京都）、神奈川県川崎市の特別養護老人ホーム生活支援員を経て、2001年に鹿屋長寿園に勤務。08年から現職。社会福祉士、介護支援専門員、認知症ケア専門士。

南日本新聞　2012・5・21（月）